研究ノート：「北田秋圃」をさがして
～ *Little Women* の初邦訳『小婦人』の翻訳者をさがす旅～
A Tireless Search for 'KITADA Shuho': Who Is the First Translator of *Little Women*?

小松原　宏子
Hiroko Komatsubara

要旨：ルイザ・メイ・オルコット作『若草物語』は今もなお世界中で多くの読者に愛されている名作である。原題を *Little Women* というこの小説は、日本では明治 39 年（1906 年）に北田秋圃という翻訳者の手によって、彩雲閣という出版社から『小婦人』というタイトルで初邦訳された。しかし、この「北田秋圃」が何者であったのか、どのようないきさつで *Little Women* を翻訳することになったのか――その正体は謎に包まれている。たったひとつの情報である 1994 年の新聞記事を手掛かりに、代議士・高橋本吉夫人であったと言われる「北田秋圃」という翻訳者・高橋なをを追いかけてみることにした。

キーワード：若草物語、小婦人、北田秋圃、高橋本吉

Abstract: One of the great pieces of American literature from the 19th century, *Little Women*, authored by Louisa May Alcott, was first translated into Japanese in 1906 under the pen name Kitada Shuho. The title she chose was *Sho Fujin*, which means 'little women' and it was published by Saiunkaku. Kitada Shuho, however, never published other works and no one seems to know much about her. I began this research after reading a short newspaper article published in Yomiuri Shimbun on July 6th in 1994. Her real name was Takahashi Nao, the wife of a politician, Takahashi Motokichi.

Keywords: *Little Women*, Sho-Fujin, Kitada Akiho (or Kitada Shuho), Takahashi Motokichi

1. 原作 *Little Women* と『小婦人』

1.1 *Little Women*

Little Women（『若草物語』）はアメリカの作家ルイザ・メイ・オルコットによって 1868 年に書かれた自伝的作品である。南北戦争時代のアメリカ北部に生きたマーチ家の四人姉妹、長女メグ、次女ジョー、三女ベス、四女エイミーの一年間を描いた物語であり、主人公である次女ジョーは作者ルイザ自身がモデルであるとされている。

マーチ家は、かつては裕福な一家であったが、父親のマーチ氏が困っている友人を救済

するために財産を失い、経済的にきびしい状況に追い込まれている。さらに、従軍牧師として戦地に赴いたため、母親のマーチ夫人は家政婦のハンナに助けられながらも、ひとりで夫の留守をまもり四人の子育てをしている。長女メグはよその家の子どもの家庭教師、次女ジョーは裕福な伯母の世話係として働きに行き、内気なベスは自宅にとどまって家事手伝い、四女のエイミーだけが学校に行く、という生活である。そのなかで隣人のローレンス老人とその孫のローリーと育んでいく友情や、家庭のなかで起こる小さな事件などが語られていく。

この物語には家政婦ハンナ以外のほぼ全員に実在のモデルがいるとされており、ストーリー自体のおもしろさもさることながら、19 世紀のアメリカ東部の中流家庭の暮らしが活き活きと描かれていて、そういった点でも興味深い。四姉妹の日常を描いただけともいえるこの作品の人気は根強く、150 年以上経った今でも衰えを見せない。物語のなかに登場する料理やお菓子のレシピ本も続々と出版されているし、日本語に翻訳されているものも多い。オルコットの記念館であるコンコードのオーチャード・ハウスは、コロナのパンデミックまでは世界各国からの観光客がひきもきらず、本年 8 月の再開時からは、人数制限にもかかわらずアメリカ国内から訪れる訪問者で連日にぎわっているそうである。

日本においての人気も本国アメリカにひけをとらず、1906 年の初翻訳から 2020 年までに翻訳出版された点数は 194 点、翻訳者数は 94 名、出版社数は 76 社にのぼる（筆者調べ）。今後も新訳による出版は続いていくであろう。時代とともに日本語も変化することを思うと、翻訳文学というものは、訳や訳者が交替していくことによって時に原作以上に新鮮さを保ったまま生き延びる可能性も秘めている。もしかしたらアメリカ以上に日本で愛されるという逆転の日も来るかもしれない。

1.2 『小婦人』

そしてその皮切りとなった作品が『小婦人』であった。

1906 年（明治 39 年）12 月の初出である。

当時、まだ翻訳文学は一般になじみがなかったためか、主人公の名まえがみな日本のものに替えられているのがおもしろい。

長女メグは菊枝。本名のマーガレットからとったものであろう。

次女ジョーは孝代。妹たちには孝と呼ばせている。ほんとうはジョゼフィーンなのにジョーと呼ばせているところから、男の名まえにかえやすいものにしたものらしい。

興味深いのは三女ベスが露子というところである。病弱で、夭逝する運命にあるベスには「露のようにはかない子」と名づけたわけである。なかなか絶妙なネーミングである。

四女エイミーはそのまま音を活かして恵美。それなら長女も「めぐみ」にしそうなものだが、せっかくなので英語の意味を優先したのかもしれない。そういえば、英語の名まえには意味があるものが少ない。『鏡の国のアリス』でアリスがハンプティ・ダンプティに「お

まえの名まえの意味は何だ？」と聞かれて驚くシーンがあるが、日本人にとっては逆にこのせりふの意味がわからず、とまどうかもしれない。日本では子どもには願いや愛情をこめて名まえを決めることが多いからだ。訳者の北田秋圃は、のちに自分でも三人の娘を育てることになるが、どのような思いで名まえをつけたのであろうか。

傑作なのは、四姉妹の苗字である「マーチ」。これを北田は「進藤」という名に訳した。マーチだから「行進」ということであろう。なかなかウィットに富んだ訳し方である。

しかし、この試みは、本文においてはあまりうまく働かなかったようだ。

このあたりのことについては、ドラージ土屋浩美氏による「明治翻訳小説『小婦人』お転婆ヒロインの登場」（2010）に詳しい。

> まず、『小婦人』の舞台は日本と設定されている。 クリスマスパーティーは、元旦の新年会に変えられ、娘たちの年齢も数え年で数えられている（例えばメグは原文では 16 歳となっているが、翻訳では数え年の 17 歳に直されている）。地名も日本の地名に置き換えられ、登場人物の名前も日本名に直されている。これは、この作品が特別というわけでなく、翻訳文学がまだ揺籃期にあり、「文学」という概念すらも確立されていなかった明治時代 ではよく見られることであった。March Family は 進藤一家（March は英語で「行進する」という意味）。Meg（Margaret）は、菊枝（Margaret は、菊 の花を意味する）。Jo（Josephine）は、孝代（彼女の名前の意味は後で論じる）。Beth は露子。そして Amy は、恵美子。ちなみに、隣に住む資産 家の息子、ローリーは俊夫で、彼の家庭教師である Brook 先生は、小川先生と訳されている。 しかし、このように全て日本名に訳すことにより、つじつまが合わない部分も出てくる。例えば、孝代の髪の色が「黄金色」と訳されていたり、クロケットの試合をイギリス人の子供たちとしている最中に言い争いとなる場面で、孝代は「亜米利加人は、ウソをつきません」と自分のことをアメリカ人だと宣言したりする。このように、日本語に訳すことにより、無理が生じる箇所がしばしば出てくる。（ドラージ土屋 2010: 140）

また、『小婦人』は抄訳であり、全篇の完訳ではない。これについても前出のドラージ土屋氏の論文の中に端的な記述がある。「例えば、恋愛に 関する部分はすべて省かれている。ローリーのジョーへの恋心や、それを示唆する箇所は削除され、また、メグとブルック先生との恋愛も、さらに、彼らが婚約する箇所までも省かれている。」（ドラージ土屋 2010: 140）

『小婦人』についてのドラージ土屋氏の考察はたいへん興味深く、的を射たものであり、作品についての研究はここに書きつくされていると言っても過言ではない。『小婦人』の原本はほとんど現存していないが、国会図書館のデジタルライブラリーで閲覧が可能である。興味のある方にはぜひ同氏の論文とともにこの初邦訳を全文味わっていただきたい。

しかし、ここでは翻訳者である北田秋圃という人物に視点を移していこうと思う。

2. 北田秋圃とはだれか

2.1 作品序文によるヒント

本国アメリカですでに絶大な人気を博していたこの作品を日本で初めて翻訳したのが北田秋圃。出版社は彩雲閣とされている。

しかし、この出版社はもはや現存せず、北田秋圃という名の翻訳者が他の出版物を出したという後の記録もない。この人物が何者であり、どのようないきさつでこの人気の作品を翻訳するに至ったのかは長年の謎であった。

唯一のヒントだったものは、作品に付せられた序文である。中表紙に

「坪内逍遥序
饗庭篁村序
北田秋圃女史譯並畫」

とある。(『小婦人』彩雲閣　中表紙)

これにより、「北田秋圃」が女性であることと、挿絵も描いたことがわかる。

また、訳者自身のよる「はしがき」には、こう記されている。

本書は米國の文壇に其名聲嘖々たる Miss Alcott の著書 Little Women を抄譯したるものなり。原著は巧妙なる章句を以て充たされ、花あり實あり、喜怒哀樂の情紙表に溢れ、習慣風俗寫し得て眞に迫り、一個の美文家庭讀本として修身齊家の栞ともなすべきものなり。國語國文をだに能くせざる身を以て他國の文學を譯して原著の面影を傳へんと企つること、本來過分の業なれど、恩師の助力と切なる勧めとに任せ、かつは原著の版権所有者よりも懇なる同情を寄せられたれば、不文を顧みず梓に上すことゝはなしぬ、只夫れ玉を變して瓦となしたるの責は譯者にあるものとして、見る人諒し給わんことを希ふになん。

菊かをる窓のもとにて

明治三十九年十月　　譯者しるす

(『小婦人』彩雲閣「はしがき」)

非常に謙虚なこの文章を読むかぎり、「北田秋圃」は翻訳を手掛けるのは初めての若い女性と見受けられる。翻訳にあたって「恩師」の助力を得たことも包み隠さず書いている。「國語國文をだに能くせざる身を以て」「玉を變して瓦となしたるの責は譯者にあるものとして、

見る人諒し給わんことを希ふ」などという言葉のはしはしに、謙虚を通り越して自信のなさまで感じる読者もいるかもしれない。それだけに初々しさ、新鮮さもまた伝わってくる文章である。

しかし、原作の ***Little Women*** のほうは、本国アメリカで出版されたのは 1868 年。明治維新の年である。すでに職業作家としてデビューしていたオルコットは、この作品によってブレイクし、ついには印税で親の借金を返したばかりでなく、それ以降立て続けに続編や他の少女向け作品を上梓し、人気作家としてゆるぎない地位を築いていくことになる。

北田秋圃がこの作品を初邦訳したのは 1906 年。約 40 年の時を経て、***Little Women*** はすでにアメリカではベストセラー、いや、名作のひとつとなっていたはずである。そのような人気小説を初翻訳するにあたって、なぜ経験のないこの若い女性が選ばれたのか。彩雲閣という出版社についての手掛かりも今となってはほとんどないのだが、この女性とどのようなつながりがあったものなのか。序文では坪内逍遥、饗庭篁村という錚々たる文豪がことばを寄せている。若く謙虚で恥ずかしがりやのように見受けられるこの翻訳者はいったいどのような人物でどのような立場の女性だったのか。なぜこの不朽の名作一冊だけを訳し、彗星のように現れ消えてしまったのか。考えれば考えるほど謎めいてくる。

筆者は昨年、『若草物語』という邦題についての論考をまとめたが（小松原 2021）、その際この『小婦人』についても多少調べてみた。そして、「小婦人」は‘Little Women’をそのまま日本語に置き換えただけのような邦題だが、もしかしたら当時日本でも人気を博していたバーネットの『小公子』『小公女』にぶつけたタイトルだったのかもしれない、という仮説を立ててみた。

いずれにしても、おそらくはこの二作品に対抗するだけの力をもったアメリカ文学という出版社の肝いりのもとに企画された可能性が高い。「はしがき」を見ると、版権を勝ち取るのにもそれなりの努力や苦労があったことが考えられる。そのようなビッグなタイトルに、おそらくは翻訳者としてだけでなく物書きとしても素人だったと思われる若い女性を配した理由はいったい何だったのだろう。

2.2　読売新聞の囲み記事

謎の解明の大きなヒントになるのは 1994 年 7 月 6 日の読売新聞朝刊記事「若草物語を初翻訳」である。というよりは、むしろこの一通の投書がなかったら、「北田秋圃」は永遠に「謎の人」であったことだろう。非常に小さな記事であるので、ここに全文を記載しておく。

> 世界中の子供たちに親しまれている L.M. オルコットの「若草物語」。写真は、この米国小説を初めて日本語に翻訳した三人の女性で、松村さんの亡き母、高橋なほ子さん（写真左）が大切にしていた。
>
> 写真の裏には「明治四十年一月八日撮影　小婦人出版記念として　北田秋圃」

と書いてある。

「小婦人」は、「若草物語」の原題「Little Women」の直訳で、当時翻訳出版された本の題名。「北田秋圃」は三人共同のペンネームで、「田」は高橋の「た」、「圃」はなほ子の「ほ」から取ったという。

なほ子さんは、政友会の代議士だった夫・高橋本吉が米国プリンストン大学に留学中、東京の塾で英語を学んでおり、あとの二人はその時の仲間らしい。松村さんは、「『小婦人』には、母が描いた日本画風の挿絵も載っていました。もう手元にはないので、どなたかお持ちの方があれば、見せていただきたいのですが」と話している。

秘蔵写真館

若草物語を初翻訳

世界中の子供たちに親しまれているL・M・オルコットの「若草物語」。写真は、この米国小説を初めて日本語に翻訳した三人の女性で、松村さんの亡き母、高橋なほ子さん（写真左）が大切にしていた。

写真の裏には、「明治四十年一月八日撮影　小婦人　出版記念として　北田秋圃」と書いてある。

「小婦人」は、「若草物語」の原題「Little women」の直訳で、当時翻訳出版された本の題名。「北田秋圃」は三人共同のペンネームで、「田」は高橋の「た」、「圃」はなほ子の「ほ」から取ったという。

なほ子さんは、政友会の代議士だった夫・高橋本吉が米国プリンストン大学に留学中、東京の塾で英語を学んでおり、あとの二人はその時の仲間らしい。松村さんは、「『小婦人』には、母が描いた日本画風の挿絵も載っていました。もう手元にはないので、どなたかお持ちの方があれば、見せていただきたいのですが」と話している。

東京都渋谷区、元国際基督教大学図書館長・松村たねさん（七六）所蔵

「小婦人」（日本近代文学図録より）

【若草物語を初翻訳】1994.7.6 読売新聞〔秘蔵写真館〕
東京都渋谷区、元国際基督教大学図書館長・松村たねさん（七六）所蔵

それまで何のヒントもなく、まったくの謎につつまれていた「北田秋圃」の正体について、これはまさにのけぞるほどの画期的な記事である。

この記事より、「北田秋圃」は上皇陛下の家庭教師に任命され来日したエリザベス・グレイ・ヴァイニング氏の通訳兼秘書を務め国際基督教大学図書館長であった松村たね（1917-2018）の母であり、秋田県出身の代議士・高橋本吉の妻であったことがわかる。

しかしここでまた大きな謎が残ってしまった。ひとつは「三人の共同ペンネーム」であるのであれば、あとの二人はいったい誰なのか。「北田秋圃」の「田」が高橋の「た」、「圃」がなほ子の「ほ」であるのなら、あとの二人には「北」と「秋」がつくのか。

松村たねの生年が1917年であることを考えると、1906年の時点でその母親である高橋なほ子は相当若かったと考えられる。代議士の妻とはいえ、何の文学的実績もなかったこの一女性がなぜ大作の訳をまかされたのか。逆に、その後の人生も長かったことであろうに、***Little Women*** の一作だけを訳し、その後何の業績も残さなかった理由は何なのか。

3. 北田秋圃をさがして

Little Women の編訳を手掛けたこともある筆者（10歳までに読みたい世界名作5『若草物語』/ 学研教育出版）は、日本で初めてこの名作を訳した「北田秋圃」に惹かれ、彼女をさがす旅を始めた。目的はひとつ。「あとの二人」をさがすことである。

最大の手掛かりとして、まずは松村たねが所有していたこの「北田秋圃」の記念写真の実物をさがすことにした。それがあれば、裏にほかの二人の名まえが書いてあるかもしれない。

もうひとつの手掛かりは「東京の塾」である。当時、若い女性が英語を学ぶ機会はどれほどあったか。「秋圃」である三人の女性が英語を習っていた「塾」をさがすことは、現代ほど荒唐無稽な話でもあるまい、と考えたのである。

3.1 国際基督教大学図書館

まずは、国際基督教大学副学長のMark Williams氏を通して、松村たねが初代館長をつとめ、たねの記念展も開催したことのある大学図書館を訪ね、現図書館長の久保誠氏にお願いして多くの資料を閲覧させていただいた。

予想はしていたものの、たねの資料は豊富である一方、その母である高橋なほ子の関連のものは見つからず、当然のことながら懸案の写真もなかった。

しかし、保管されていた資料の中に、のちに手掛かりとなるものが2点見つかった。

ひとつは、「掲載紙をお送りします」というメモが入った読売新聞社の封筒。けれども、いつのものか、なんの記事のものかはわからない。社会的地位が高く、活躍の場も多かった松村たねが新聞に載ったり原稿を寄せたりしたことは多々あったであろう。これだけでは何の手掛かりにもならない、とその時は思われたが、とりあえず記者の名まえだけは写真を撮らせてもらった。

もうひとつは、『秋田代議士物語』という小冊子のコピーである。発行日は1989年6月5日、著者は杉渕廣、発行は秋田魁新報社とある。

ここには、「高橋なほ子」の夫である代議士、高橋本吉について詳しく書かれていた。細かいところの誤記には、おそらく松村たねの手によるものと思われる訂正や補記が書き込まれている。

特に興味深いのは、本吉が明治32年に坪内逍遥の知遇を得て、35年8月に逍遥の媒酌

で親族から妻をめとった、という記述である。妻の名は真子とあるが、となりに「直子」という手書きの訂正が書き込まれている。この直子が「なほ子」であり、秋圃である。明治 35 年に逍遥の媒酌で結婚、39 年に『小婦人』出版、逍遥が序文・・・。一本の線が見えてきた気がする。「なほ子」が翻訳者として選ばれた過程には、夫･本吉と逍遥の縁があったということではないだろうか。

さらに、本吉・直子夫妻は熱心なクリスチャンであり、富士見町教会に属していたこと、本吉は大正 9 年（1920 年）に米国訪問中に客死したこと、富士見町教会で葬儀が行われ、巣鴨の染井墓地に眠っていることも書かれていた。

コピーのさいごはこのようにしめくくられている。

> 「妻直子との間に一男三女があり、家督は長男の太郎が継いだ。今は太郎の長男治の代で、東京都杉並区阿佐ヶ谷に住んでいる。三女は皇太子殿下の米人教師バイニング夫人の秘書だった松浦たねである」（杉渕 1989: 226）

「松浦たね」の「浦」の横に、手書きで「村」と訂正が入っている。たね自身の手による訂正と思われるので、他の人物名や地名にまちがいはないのであろう。しかしこの冊子が発行された年が 1989 年。20 年以上前のことになる。「秋圃」である「直子」の直系の親族は今もそこに住んでいるのだろうか。また、たねの嫁ぎ先である松村家にも、資料の保管先である国際基督教大学にも残っていない「北田秋圃」の貴重な写真も、その本家に存在するのだろうか。

筆者はこの冊子の著者である杉渕廣氏に連絡をとるべく、秋田魁新報社に問い合わせの電話を入れた。しかし、杉渕氏はかなり以前に退職しただけでなく、すでに鬼籍に入っておられるという返答であった。

3.2　女子英学塾（津田塾大学）

1900 年前後に、女子が英語を学んだ塾といって真っ先に思い浮かぶのは女子英学塾であろう、と教えてくれた人がいた。

そこで、元副学長の大島美穂氏を通して現在の津田塾大学に問い合わせをしたところ、津田梅子資料室の村田安代氏が非常に温かく対応してくださった。女子英学塾は第 1 期生からのすべての卒業生の名簿が保存されているそうである。時間をかけて丁寧に探していただいたが、1900 年前後に「高橋」「なほ子」「直子」「なお」など、それらしき名に該当する人物は見当たらなかったとのことであった。

残念であったが「女子英学塾ではない」というひとつの結論に達することができた。かなり広い範囲にまで広げて調査し手厚く対応してくださった村田氏、ご紹介くださった大島氏には心から感謝と御礼を申し上げたい。

3.3　読売新聞社

「北田秋圃＝高橋本吉夫人」という唯一にして最大の手掛かりとなったものは読売新聞の囲み記事である。筆者はこの記事を書いた記者になんとか話を聞けないかと思い、知り合いの現職記者に問い合わせてみた。

彼も手を尽くしてくれたが、20 年以上前の記事であり、当時の「秘蔵写真館」の担当者の名まえは調べられるものの、複数いるうえに全員がすでに退任して、この記事を書いた記者の特定はおろか、現在の連絡先も調べようがないという。記事がデジタル化してからであれば執筆者の特定はできるようになったそうだが、1994 年というのはわずかにその前だということらしい。まさにニアミスである。

悔しいけれど仕方がない、とあきらめていたある日、ふと、国際基督教大学の図書館で写真を撮らせてもらった封筒の差出人の名まえを検索にかけてみた。

すると、「読売光と愛の事業団」の理事として名まえが出てきた。同じ読売グループであるし、もしやと思ってこの事業団に問い合わせてみたところ、すでにこちらも退任していたものの、偶然にも窓口になってくださった担当者の知り合いということで、個人的に連絡をとっていただくことができた。

この元記者の方に直接メールで尋ねたところ、北田秋圃の記事はたしかにこの方が書かれたものであった。さらに、この「秘蔵写真館」は読者の投書によるものだったという。つまり、松村たねは、その地位や業績に関係なく、一般の一読者として自ら写真を提供したことになる。

その記者の方は、写真が『若草物語』の初翻訳者であったこと、投書した人物が知識人であったことから、この記事についてはよく覚えていた。しかし、写真の現物を見た記憶はなく、コピーかファクスを送ってもらったものだろうということで、「北田秋圃」に関してはそれ以上の情報は得られなかった。

3.4　日本基督教団富士見町教会

富士見町教会は、JR 飯田橋駅のすぐそばにあるモダンで大きな建物である。日本の総人口のわずか 2％と言われるキリスト教信者のなかにあって、教会員 700 人余を誇る歴史ある大教会である。

主任牧師である藤盛勇紀牧師に面会を申込み、研究のためかつて長老職（教会の役員）にあった高橋本吉・直子とその子孫について調べたい旨を伝えると、教会史を担当している長老をご紹介くださった。

しかし、富士見町教会はいちど空襲により全焼した経緯もあり、古い資料はなかなか見つけることはできなかった。外国人牧師や信者が日本人に英語を教える機会もあったらしいが、なをが教会で英語を学んだのかどうかははっきりしない。また、本吉･直子夫妻が通っていたころの教会の記録を見ても、同時期の出席者の中に、「北」「秋」のつく女性らしき

名まえはこれといって見当たらなかった。

本吉・直子の長男太郎氏についても、住所は新宿であったことまでしかわからず、それも 1989 年より以前の記録であった。また、少なくともここ何十年かの間に、高橋家の親族や関係者が富士見町教会の礼拝に出席した記録はなさそうだった。

しかし、「北田秋圃」のひとりである高橋直子の戸籍上の本名は、「直子」でも「なほ子」でもなく、「なを」であることが判明。また、生年は 1881（明治 14）年、没年は 1971 年（昭和 46 年）とみられる。『小婦人』を上梓したときは若干 25 歳の若妻だったことになる。

このころから、筆者はある疑念を抱かずにはいられなくなった。それは、「北田秋圃」はほんとうに三人の名まえを合わせた共同ペンネームなのだろうか、ということである。

高橋なをは、旧姓も高橋であった。先述の『秋田代議士物語』にも、高橋本吉は親族から妻をめとった、という記述があるが、高橋家は北秋田の名家である。ペンネームを作るのに、本名から一字とるのであれば、「高」でも「橋」でもなく「た」だけを取って「田」をあてるというのはいかにも不自然である。しかも、「圃」は「なほ子」の「ほ」だというが、生まれもっての名である「なを」のなかに「ほ」の字はない。

昔の女性はよく戸籍上のひらがなやカタカナの名まえに好きな漢字をあてていた。筆者の母も本名は「キイ」だが、長らく「紀伊子」と名乗っていた。かの村岡花子も戸籍上の名まえは「はな」だったという。「子」をつけたり漢字をあてたりするほうがモダンと思われていた時代のことである。「なを」は古臭いから、ということで、ふだんは「直子」と書いていたかもしれないし、「なほ子」と書いていた時期もあったのかもしれない。けれども、ひらがな一字を選ぶならば、当て字である「ほ」よりもむしろ「な」を選ぶのが自然ではないだろうか。

あとの二人の氏名がわからないので何とも言えないのだが、筆者は「北田秋圃」は、実質は「高橋なを」ひとりであったであろうと考えている。少なくとも中心人物であったことはまちがいないと思われる。もし三人が対等な立場で翻訳を分業したのであれば、あとの二人やその親族からも「北田秋圃」情報や記録がどこかに寄せられているはずである。三人もの人物が関わっていながら、松村たねから発せられたこの高橋なをの名まえ以外、100 年以上の月日、何の情報も残っていないというのは摩訶不思議な話である。

坪内逍遥との関係も、挿絵をなをが描いたことも、ほぼ「北田秋圃＝高橋なを」であることを示している。

何よりも、このペンネームはなをにとっての懐かしい故郷、北秋田の田園風景を連想させるものではないだろうか。自分と夫の出身地である北秋田、かがやく金色の穂がこうべを垂れる豊かな実りの風景を髣髴とさせる美しい名まえではないか。

「北田秋圃」を正式に何と読むべきかについて、『小婦人』本体に読み方の記載はない。1997 年に作成された国会図書館の典拠データには「シュウホ」とある。しかし筆者は「シュウホ」ではなく「アキホ」である可能性もあると考える。北秋田の秋の実りを反映した名

であれば、そのように読むほうが、そこに込められた高橋なをの思いが伝わる気がするのである。

4.「北田秋圃」はなぜ姿を消したか

4.1　マーチ家と高橋家のシンクロ

なをの夫・高橋本吉代議士が早すぎる死をとげたのは 1920 年。妻・なをの生年が 1881 年で合っているとしたら、39 歳のときである。実際、『大正過去帳：物故人名辞典』には、高橋本吉の逝去時の情報として「妻直子三九歳、長男太郎一二歳、外三女」の記載がある。（『大正過去帳：物故人名辞典』稲村徹元、井門寛、丸山信　共編 / 東京美術）

名家の一族の出身といえども、大黒柱の夫を亡くして四人の子供をひとりで育てた苦労は察するにあまりある。ましてや現代以上にいろいろな社会福祉制度が整っていなかった時代である。

夫の留学中に東京で英語を学ぶなど、上流家庭の主婦として不自由のない暮らしをしていたなをと、夫が財産を失うまでは裕福な暮らしをしていたマーチ夫人。両者とも後に経済的な苦労をしながら四人の子育てをし、父親不在のなかでその子どもたちを立派に育て上げ、みなそれぞれに自立して巣立っていく・・・。

それは ***Little Women*** の作者、ルイザ・メイ・オルコットとその家族の姿にも重なる。作者のルイザ自身も作品の主人公である次女のジョーと同様、作家として成功し、苦労して育ててくれた母に報いた。高橋なをの娘、たねも皇太子の家庭教師の通訳を経て大学教授、大学図書館長への道を歩んでいく。

しかし、なを自身はその後、出版の世界の表舞台から姿を消して行く。

驚いたことに、なをの周辺をいくら取材しても、『若草物語』の初翻訳者「北田秋圃」の顔は出てこない。国際基督教大学しかり、富士見町教会しかり、北秋田市関係者しかり……取材先のどこにも、高橋本吉夫人であり、松村たねの母である高橋なをが、日本で初めて『若草物語』を訳した翻訳者であることを知る人はいなかった。

三女・松村たねの後半生で最も近くにいたと考えられる恵泉女学園史料室の松井弘子元教授さえも、その母なをが『若草物語』の初の翻訳者であったということを耳にしたことはないという。たねはなぜ、母親の業績を周囲に伝え、後世に遺そうとしなかったのか。

ひとつの推論であるが、なをはマーチ家でいえば三女ベスのような気質だったのではないだろうか。

夫・高橋本吉と坪内逍遥のはからいによって得た名作の初翻訳の仕事に対して、自分はまだ力不足であったと考えていたことが「はしがき」のそこここから感じ取れる。ここにある「恩師」がだれであるかまだ判明していないが、筆者は、逍遥自身であるか、もしくは写真に写っている立ち姿の女性ではないかと考える。この女性だけがあとの二人よりだ

いぶ年嵩に見えるし、中央の立ち位置にも存在感がある。

いずれにしても、写真で見るなをの顔立ちからは、謙虚で控えめな性格が覗える。自力で勝ち取った仕事でなく、自分ひとりの仕事でもないものを誇る気持ちはおそらくなく、むしろひっそりと自分の中に秘めていたのかもしれない。そして、手を貸してくれた人々に感謝をこめて、「ペンネームは三人のもの」と、後付けで決めたのかもしれない。

それを三女たねも知っていたから、ことさらにひけらかすことはなかった。が、母が訳した『小婦人』を一度この目で見てみたい、という思いから新聞に投書をしたのではないか。記事のあと、『小婦人』の実物を提供する人は現れただろうか。大学関係には、国際基督教大学にも恵泉女学園にも、たねの遺品のなかに『小婦人』はないそうである。

もうひとつの推論は、坪内逍遥との関係が疎遠になったのではないかということである。もともと、逍遥と高橋本吉は年齢も離れている。『秋田代議士物語』によると、逍遥と本吉が知り合ったのは 1899 年（明治 32 年）。40 歳の逍遥はすでに『小説神髄』（1885-86）を発表し、文豪としての名声を得ていたが、一方の本吉はまだ 26 歳の早稲田中学・早稲田実業講師。逍遥の媒酌で結婚したあと、政治家の道を模索し始める。

本吉が亡くなった 1920 年 11 月 27 日前後の『坪内逍遥日記』（逍遥協会 2000）には、本吉の死に関して何の記述もない。現役の代議士が海外で急逝し、当時かなり新聞をにぎわした出来事であったのであるから逍遥の耳にも入らなかったはずはない。かつて媒酌をし、その新妻に大きな仕事を提供した（少なくとも序文を書いて協力した）関係にしては、ずいぶん冷たい気がする。どこかで袂を分かったものか。自然に疎遠になっていたのだろうか。

あるいは悲しみのあまり記述できなかったのかもしれない。本吉が亡くなったのは現地時間の 11 月 27 日。『秋田代議士物語』には、次のような記述がある。「大正九年十一月三十日の秋田魁新報三面に次の記事が載っている。本県三区選出の代議士高橋本吉氏は、過般米国視察の途に上りたるが、二十七日ポートランドに於いて死去せる旨、一昨夜電報ありたり。」（杉渕 1989: 225）

記事が掲載されたのが 30 日、電報が届いたのが「一昨夜」ということは 28 日ということになる。当時の通信事情等を考えると、東京の新聞には 29 日に記事が出ていたことであろう。逍遥日記の大正 9 年 11 月の日記は、本吉逝去の 27 日から次のようになっている。

十一月二十七日　土
起稿中
孤島　孤月　日高来
矢崎　其妹及婢と共ニ藤間へ入習の礼ニ来る
樋口二葉　透写絵（嵐小六ネハン）持参
夜　三田村来

十一月二十八日　日
服部嘉香
俳優鈴木邦三（羽太の友人）
小田内
竹内松治来
春陽堂の写真師来り　大阪の長田より借りし大阪番付を撮影
午後　文化事業会　三時間

十一月二十九日　月
（空白）

十一月三十日　火
夕　藤蔭会（しづえ）の新舞踊を観る
八木来泊
早稲田文学一月号浄書

十二月一日　水
故田村成義告別式　代々木正春寺
午後　永楽倶楽部行 「回春泉の試練」稽古　舞台装置

逍遥日記はこのような調子でほぼ毎日何かしらの書きつけがある。もちろんない日もあるのであるが、本吉の訃報に触れたはずの前後の時期に、それに関する記述が一切ないのが気になる。しかも、全国民が驚くような出来事であったはずであるのにもかかわらず、である。

日本時間で一般の新聞読者に第一報が入ったと思われるこの 11 月 29 日、逍遥はあえて何も記さなかったのであろうか。それとも、ただ単に書くことがなかったのだろうか。

坪内逍遥の日記は 1910 年（明治 43 年）から始まっていて、残念ながら高橋本吉との出会いや結婚の媒酌、『小婦人』序文の時代の記録はない。当時の逍遥と本吉の関係については今では知る由もないが、少なくとも『小婦人』以降、高橋なをは逍遥と関わることなく、翻訳の世界に別れを告げ、日々生きていくことと子どもたちを育てることに心血を注いだと思われる。

女手ひとつで育てた子どもたちは立派に成長し、長男太郎は家督を継ぎ、三人の娘たちのうち、長女・次女は海外で活躍し、三女は皇室を支える通訳兼秘書になった。ひとりの母としてどれほど晴れがましく思ったことだろう。自分自身のすがたをマーチ夫人やルイザの母アビー・オルコットと重ね合わせたこともあっただろうか。

4.2　今後の調査と『小婦人』再評価について

なを本人の没年が 1971 年、読売新聞の記事が 1994 年、三女・松村たねの没年がたった 3 年前の 2018 年であったことを思うと、もう少し早く手をつけていたら、もっと多くの事実がたやすく明るみに出て、高橋なを、もしくは北田秋圃の功績にも光が当たったのではないかと思うと残念でならない。

しかし、個人情報の壁とコロナ・パンデミックのために阻まれ続けている調査も、多くの方々の助力のもと、少しずつ前に進もうとしている。現在、松村たねが長く教授として在籍していた恵泉女学園大学の史料室、北秋田市で郷土史編纂をされている方々にもご協力を仰いでいる。

恵泉女学園からは、なを氏の写真がいくらか保存されていると連絡を受けており、北秋田市の関係者からは、なをの親族の連絡先がわかるかもしれないとの可能性をいただいている。また、版権のことでアメリカのほうに資料が残っている可能性も捨てきれない。コロナが終息したらその方面でも調べてみたい。

今回の調査で「北田秋圃」については 8 割がた実像が見えてきた気がしているが、残る 2 割（「三人」であるならばあとの二人、***Little Women*** を翻訳するに至った経緯、その後翻訳も執筆もしなかった理由）が判明すればいっそう嬉しい。

コロナ・パンデミックのさなか、閉館を余儀なくされていたオーチャード・ハウスでは、毎週日曜日にオンラインで Facebook ライブを行い、さまざまな情報を発信していた。なかでも 2020 年 8 月には日本人スタッフであるミルズ喜久子氏が、流暢な英語でこの初邦訳『小婦人』の魅力について語ったことは非常に印象的であり、この調査のきっかけにもなった。読売新聞の記事について教唆くださったのもミルズ氏である。

現在「本邦初翻訳」であること以外、特筆されることの少ない『小婦人』であるが、明治の世にようやく活躍の一歩を踏み出した若い女性の貴重な仕事が見直され、再評価されることにもつなげていきたい。

そのためにも、細く長く、この魅力あふれる謎に挑み続けていきたいものだと思っている。

注

本文における『若草物語』は、*Little Women Part I* を指すものである。

Special Thanks:

The author would like to thank the following: Ms. Kikuko Mills（ミルズ喜久子氏), Louisa May Alcott’s Orchard House, Concord, MA, USA.

北秋田市　生涯学習課 文化係

恵泉女学園大学　史料室

国際基督教大学　大学図書館
佐藤伸 氏（北秋田市　郷土史研究者）
津田塾大学　津田梅子資料室
日本基督教団　富士見町教会
読売新聞社

参考文献

稲村徹元、井門寛、丸山信　共編（1973）『大正過去帳：物故人名辞典』東京美術
オルコット（1904）『小婦人』北田秋圃、彩雲閣
杉渕廣（1989）『秋田代議士物語』秋田魁新報社
逍遥協会（2000）『逍遥日記』逍遥協会
小松原宏子（2021）「『若草物語』はなぜ『若草物語』なのか：*Little Women* の邦題を考える」多摩大学グローバルスタディーズ学部紀要　2020 年度　第 13 号 31-52.　発行：多摩大学グローバルスタディーズ学部
ドラージ土屋浩美（2010）「明治翻訳小説『小婦人』お転婆ヒロインの登場」 比較日本学教育研究センター研究年報 第 6 巻 139-146.　Center for Comparative Japanese Studies Annual Bulletin 発行：お茶の水女子大学比較日本学教育研究センター
読売新聞（1994.7.6）「若草物語を初翻訳」

Accepted on 25th October 2021